



TITLE:

表紙ほか

AUTHOR(S):

---

CITATION:

表紙ほか. 研究報告 2005, 19

ISSUE DATE:

2005-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/134454>

RIGHT:

# 研 究 報 告

## 第 19 号

手紙を書く騎士……………	青 木 三 陽	(1)
—『バルツィヴァール』における「学識」と「書物」の意味について—		
文学創作への萌芽としての音楽美学……………	樋 口 梨々子	(19)
—E.T.A.ホフマンの短編『ドン・ファン』試論—		
ホーフマンスタール文学における生と絵画……………	寺 井 絃 子	(35)
ウィーン分離派館とヨーゼフ・マリア・オルブリヒ……………	浅 井 麻 帆	(57)
—時代と分離派が求めた合目的性—		
結び目としての神経……………	熊 谷 哲 哉	(75)
—シュレーバーにおける宇宙と身体—		
手紙論としての手紙……………	池 田 あいの	(95)
—カフカの恋文をめぐる—		
ショーシャ夫人は美しいか……………	伊 藤 白	(115)
—トーマス・マン『魔の山』における女性像と「東」—		
ジャズアレンジされるヨーロッパ……………	池 田 晋 也	(135)
—ハンス・ヤノヴィッツの小説『ジャズ』—		
モラリストへの成長……………	武 田 良 材	(155)
—ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その二—		
〔書評・文献紹介〕		
Peter Demetz: Böhmishe Sonne, mährischer Mond. Esseys und Erinnerungen……………	佐々木 茂 人	(175)
近年のヨハンナ・シュピエリ研究の動向……………	川 島 隆	(177)

2005

京都大学大学院独文研究室

## 『研究報告』バックナンバー

### 第1号(1985)

- 大川 勇: ある深層の物語の読解 — ムー  
ジルの『特性のない男』研究のための序説  
金子 孝吉: リルケの詩『偶像』について  
田辺 玲子: 関係世界の創出 — アネッテ・  
フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの詩人像とそ  
の世界  
奥田 敏広: トーマス・マンの「モンタージュ技  
法」について — 小説形式のパロディー

### 第2号(1986)

- 松村 朋彦: 心理学と小説のあいだ — カー  
ル・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライ  
ザー』とその周辺  
大川 勇: 千年王国を越えて — ムージルの  
『特性のない男』における〈別の状態〉の行  
方  
加藤 丈雄: 『公子ホムブルク』について — 死  
の恐怖とその超越を中心に  
奥田 敏広: リオン・フォイトヴァンガーの小説  
『成功』におけるヒトラー像について — 20  
年代の証言の一つとして

### 第3号(1988)

- 加藤 丈雄: ハッピーエンドと悲劇 — 『公子ホ  
ムブルク』の多義性について  
兵頭 俊樹: ヘルダーリンの‘Wie wenn am  
Feiertage...’に現れるディオニュソスの形  
象をめぐって  
竹本 まや: トーマス・マンの『すげかえられた  
首』試論  
友田 和秀: 『魔の山』試論 — 主人公ハンス・  
カストルプの形姿をめぐって

### 第4号(1990)

- 津田 保夫: 『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメ  
シスの悲劇の観点から

- 千田 春彦: フライダングの『ベシヤイデンハイ  
ト』研究のために — 三つの《はざま》をて  
がかりとして  
宮田 眞治: 覚醒へ向けての夢想 — 『ハイン  
リッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論(1)  
千田 まや: トーマス・マンの『ファウストゥス博  
士』 — デューラーの機能についての一考  
案  
斎藤 昌人: 一カフカ像 — 『流刑地にて』をめ  
ぐって

### 第5号(1991)

- 青地 伯水: ホーフマンスタールの『厄介な男』  
における「なおざりにされた生」と「達成され  
た社会性」  
谷口 栄一: C. F. マイアーの『ユルク・イエナッ  
チュ』について — その多義性に関する一  
考察  
津田 保夫: 後期シラーの悲劇論に関する一考  
察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に  
斎藤 昌人: 閉ざされる世界

### 第6号(1993)

- 片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進  
曲』 — 「比較」と「繰り返し」のモチーフを  
めぐって  
千田 春彦: デア・シュトリッカーの『閉じ込めら  
れた女房』について — 物語の重層構造  
の目指すもの  
福田 覚: 自然模倣説における真理媒介の構  
造(1) — レッシング〈詩学〉に潜在する模  
倣説の輪郭  
青地 伯水: W. ヒルデスハイマーの『リープ  
ローゼ・レゲンデン』におけるグロテスクなも  
のについての一考察

### 第7号(1994)

飛鳥井 雅友: 「しばしばそれは絶望的な対話  
なのです」 — パウル・ツェラーンにおける  
対話の概念をめぐって

吉田 孝夫: 時間の渦 — R・M・リルケ『新詩  
集』の数篇から

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二  
つの方向

### 第8号(1995)

濱中 春: シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二  
人の女王のドラマ

中村 直子: 分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友: 神学の拒否と詩学 — パウル・  
ツェラーンにおける神義論の問題

### 第9号(1996)

中村 直子: 正書法と分離動詞

濱中 春: シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけ  
るスイスの風景

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『百日天  
下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー

飛鳥井 雅友: 「胸は張り裂け」 — ゴットフリ  
ート・ベンの場合

### 第10号(1997)

濱中 春: シラーの『逍遙』における風景を  
めぐって — 風景の補償モデルとその矛盾

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓  
話性(1) — 散文小品『通り(1)』について

片桐 智明: 物語の行方 — ヨーゼフ・ロートの  
『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納骨  
堂』をめぐって

### 第11号(1998)

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓  
話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文  
小品について

片岡 宜行: ドイツ語の与格の分類について

國重 裕: クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追  
想』について — その語りの構造

飛鳥井 雅友: ゴットフリート・ベンにおける〈抒  
情的自我〉概念の登場をめぐって

### 第12号(1999)

片岡 宜行: ドイツ語の与格と空間補足語につ  
いて

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーの絵画描写  
について — エクブラシスの観点から

片桐 智明: ハイミート・フォン・ドーデラー四十  
歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴ  
ンの小説

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen  
Phantasiewelt und Wirklichkeit --  
Essay über Ilse Aichingers „Die  
größere Hoffnung“.

### 第13号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm  
Tell als ästhetisches Projekt.*

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける通  
俗小説とメルヘンの再話について — 対  
句法に関する試論

### 第14号(2000)

廣川 智貴: 文体論の理論と実践 — クライス  
トの『ロカルノの女乞食』を例にして

佐々木 茂人: カフカの作品における歌のモ  
ティーフ — 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは  
ネズミ族』を中心に

國重 裕: オーストリア小説に見る《家族ドラマ》  
の変遷 — M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』  
(1996)

#### 第 15号(2001)

- 伊藤 白: 『ブデンプローク家の人々』試論 — 「市民と芸術家」の生み出す四つの類型から
- 池田 晋也: アルトウール・シュニッツラーの『自由への道』 — 市民的なものと芸術的なもののあいだを浮遊する生
- 川島 隆: カフカの息子たち — 短篇「十一人の息子」読解
- 中原 香織: ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について — 葛藤の不在がもたらす問題をめぐって
- 羽坂 知恵: 日常の「ヒーロー」 — ハインリヒ・ベルの『道化師の意見』について

#### 第 16号(2002)

- 佐々木 茂人: 東方ユダヤ人難民とプラハのユダヤ人 — カフカの伝記研究のために
- 川島 隆: 「こいつは途方もない偽善者だ」 — カフカの中国・中国人像
- 國重 裕: ユーゴスラヴィア内戦をめぐる西欧知識人の応酬 — ペーター・ハントケ『冬の旅』に対する議論を中心に

#### 第 17号(2003)

- 池田 晋也: 描かれた劇場 — シュニッツラーの短篇『侯爵様御臨席』
- 伊藤 白: ゼゼミ・ヴァイヒプロート — 『ブデンプローク家の人々』における女性像とキリスト教
- 川島 隆: ユダヤ人と中国人 — カフカにおける人種と性愛をめぐって
- 武田 良材: クラウス・マンの『メフィスト』 — ドイツ反ファシズム運動の失敗の反映として

#### 第 18号(2004)

- 廣川 智貴: 主語の文体論 — クライストの『決闘』を中心にして
- 熊谷 哲哉: 言葉をめぐるたたかい — シュレーバーと雑音の世界

- ASAI Maho (浅井麻帆): Sehen im Wörterverbindungsraum bei Rainer Maria Rilke — Eine Wandlung vom Sehen hin zur Rose
- 川島 隆: 『万里の長城』における「男性」と「労働」の位置 — カフカのシオニズム理解を手がかりに
- 伊藤 白: 白いドレスのロッテ — トーマス・マン『ワイマールのロッテ』における女性像
- 武田 良材: 道徳的な女たらし — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像
- 國重 裕: 現代文学は「歴史」を語りうるか? — Katrin Askan (1966~)に見るDDR 文学の現在
- 書評・文献紹介

# INHALT

AOKI Sanyo :

Der Ritter liest und schreibt

— Über die Schriftlichkeit in Wolframs „Parzival” ..... (1)

HIGUCHI Ririko :

Musikästhetik als Ansatz zum literarischen Schaffen

— Eine Analyse der Novelle *Don Juan* von E.T.A. Hoffmann ..... (19)

TERAI Hiroko :

Das Leben und die Malerei bei Hofmannsthal ..... (35)

ASAI Maho :

Das Wiener Secessionsgebäude und Joseph Maria Olbrich

— Auf der Suche nach einem zweckmäßigen Ausstellungsgebäude .... (57)

KUMAGAI Tetsuya :

Nerven als Knoten

— Kosmos und Körper bei Schreber ..... (75)

IKEDA Aino :

Briefe als Reflexion über Briefe — Kafka's Liebesbriefe ..... (95)

ITO Mashiro :

Ist Madame Chauchat schön?

— Zum Frauenbild und „Ost“ im *Zauberberg* ..... (115)

IKEDA Shinya :

Verjazztes Europa — Hans Janowitz' Roman *Jazz* ..... (135)

TAKEDA Yoshiki :

Die Entwicklung zum Moralisten

— Moralisten in der Literatur Hermann Kestens (2) ..... (155)

Rezensionen ..... (175)

## 研究報告 第 19 号

非売品

2005 年 12 月発行

発行所 京都大学大学院独文研究室 研究報告 刊行会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

郵便振替 01060-2-38520

印刷所 北斗プリント社

〒606-0864 京都市左京区下鴨高木町 38-2